

するは惜しからん。されど暗黒の時期は必ず来るを以てその暗黒なる時期には——太陽は隠れ、星は退いてその光を現さざる時には——我等はその光線に燃やさる、ランブに赴き、東の未明に向へる我等の歩みのしるべを乞ふなり。我等の聴くは言はんが爲なり。アラビヤの俚諺に『無花果は無花果を眺めて實を結ぶ』と。(エマアソン)

智 慧

智慧をば我々の情慾と感情と、我々の思想と願望との尊むべき細君にするか、或ひは死の陰氣な新婦にするか、我々はその兩者の一を擇ばなければならぬのだ。停滞して居る智慧を、墓に有たせてもいゝが、熱火猶ほ燃ゆる爐への智慧も亦無ければならぬものだ。(メエテルリンク)

、恐るべき小著述、

二十の大冊を爲すの著書は、決して革命を誘起しないであらう。唯三十錢許りの携

帯に便なる小著述は恐るべきである。若し聖書にして百二十圓位もしたならば、基督教は決して建設されなかつたのである。(ヴォルテール)

行 爲 と 思想

新しき行爲は猶ほ未だ生命の一部分を成し——一時の間は我等の無意識的生命的の中に沈みたる儘に在り、黙視の時ともなれば、それは心意の一思想とならんとして、恰も熟したる果實の如くに自づとその生命より離れ落つるなり。(エマアソン)

批評といふものは

批評といふものは、どんな間違をやつても許されるが、唯有名な文學者に會つた時に、彼を知らない事だけは許されない。(シヨオ)

こ れ が 重 要

思想といふものは、思想そのものには何等の重要なものを有つては居らぬものであ

る。我々の生活を高尚にする思想の爲に、我々の心裡に喚起さるゝ感情、これが重要なのである。(メエテルリンク)

鑄鐵のやうに愛される人間

何んにも持つてゐない人々の間に、思想のある人間を置いて見ると、一定の時間の後には、魅力の抵抗の出来ない法則で、總ての空しい頭の人々は、光つた頭の園りに謙遜と、崇拜とに充ちて引き付けられてゐる。世間には鑄鐵のやうに愛される人間がある。(ユウゴオ)

懷疑主義

主義や、全體論を排斥するのは可いが、それと一所に智識や、學術を信ずる心、即ち自分を、自分の力を信ずる心、さういふものまで排斥するから、それは宜しくないと思ふのです。人間には然ういふ信仰が必要である。只感覺ばかりで生きてゐられる

ものでない。思想を怖がつて信用しないといふのは間違つた話です。懷疑主義を懐くと何も出来なくなる。何を仕遂げる氣力もなくなる。(ツルゲネエフ)

可見世界の中心人物

人にしてその思想の大なる自然の大の如くならば、自然はその腕をのべてその人を抱くなり。自然は喜んで、その人の足跡を追ふに薔薇と堇花とを以つてし、その愛兒を飾るにその崇大優美の妙線を以つてすべし。その思想をして自然に匹敵する範圍なるものたらしめよ。さらば體軀はその繪に適はん、有徳の人は自然の作品に、その調を一にし、此の可見世界の中心人物となる也。(エマアソン)

學問と文才

コセくした學問などしてゐたら、文才を失つてしまふと考へる馬鹿者があるが、實はさうじゃない、才能を養ひ、實力を養ふためには、學問に依る外はないのであ

る。(ゲエテ)

學問は憐れなもの

學問は能力なき憐れなものである。又能力なき學問は棄てられる。(サアジ)

觸れた思想

我々の現實生活に觸れることの出来なかつた思想も全然無益では無い。此等の思想は觸れた思想を助けたのである、支へたのである。然しその使命を充分に果たしたのは觸れた思想だけである。(メエテルリンク)

一個のプラットホーム

文學の用は、吾人に一個のプラットホームを與ふるものにして、此のプラットホームから、吾々は現代生活の如何を瞰下することが出来る。(エマアソン)

偏見

世人は、全く獨立した特殊な性質の一つの新しい學問に對するに當つて、彼等が已に他に得た誤信し、智識によつて其を評價しうるといふ偏見を有つてする。(カント)

學者の任務

學者は、根本に於て、詩人と同一の義務を負ふものである。即ち時代の社會的倫理的問題を先づ自ら明らかにして、依て以て他人にも之を明かにせしむる。任務を有してゐる。(イブセン)

智識の價值

智識の價值は、それを語る人の眞卒の如何によりて、増減さるべき筈のものではない。(オスカア、ワイルド)

明日の天氣丈でも分るか

人間の思想は決して時機おくれの思想以外に出ることが出来ない。未來？ 君達は

明日の天気だけでもわかるか。君達の先見するなど、いふ未来は、畢竟想像に依り感性に依つて組み立てられた過去に過ぎない。君達は自分の起つて欲しいと思ふことが起るだらうと思つてゐるのだ。まるで子供だ！（グルモン）

凡庸な化学者

恐らく偶然に、或る小さな法則でも見當てれば、それでもう自然の偉大な、凡ての作用でも看破したと自負する馬鹿な化学者がゐる。こんな輩は、最も凡庸な化学者で、到る處に澤山ゐるものだ。（ルツソオ）

大國家に於ける教育

大きな國家に於ける教育事項は、いつも甚だ平凡なものであらう。——大きな臺所に於て、料理かたがた平凡にされるに過ぎないと同じ理由から。（ニイチエ）

實際家

實際家は學問を輕蔑す。無學者は學問を驚嘆す。哲人は學問を使用す。抑も學問は自ら其の使用法を教ふるものに非ず。之を教ふるものは、一種の智慧なりとす。この智慧こそ、これ學問の外にあり、學問の上に位し經驗によつて獲得せられたるものなれ。辯駁し、攻撃せんために讀む勿れ、信受し、盲從せんために讀む勿れ。談論の材料を看出さんために讀むなかれ、惟輕重し、考究せんために讀めよ。或る書籍は、嘗め然して味ふべく、或る書籍は丸呑にして可なる可く、或僅少の書籍は咀嚼すべく、然して消化すべし。（ヘエコン）

設備や體裁

學校もその必要缺くべからざる任務あり——即ち階梯を教ゆること之なり。されど、學校の大きい我等を利するは、その目的が人を型に入れんとするにあらで、創造せんとするにある間のみ、廣く種々雑多なる天才の光線をその講堂に歡迎し、その集中せ

る熱火を以てその青年の心情を燃え立たしむる間のみ。思想は其の性質として設備や體裁から何等の益を得るものにあらず。(エマアソン)

追加的修飾

教育は、生殖の一つの繼續である。そして往々にしてその追加的修飾のやうなものである。(ニイチエ)

學者は怠惰者

學者と稱するものは、研究で時間を殺してゐる怠惰者にすぎない。彼が偽はりの智識を要心せよ。それは無智よりも一層恐ろしいものである。(シヨオ)

思索の鸚鵡

學者といふは、委託を受けたる智力となれり。正しき學者は、思索をなす人なり。されど墮落せる學者は社會の犠牲となつて、只の思索家となり易く、尙甚しきは思

索の鸚鵡となる傾向あり。(エマアソン)

漠然たる教訓

餘りに多くの時間を學問に費すは、懶惰なり。學問を餘りに多く裝飾に用ふるは盛飾なり。全く學問の繩墨に由て判斷をなさんとするは、學者の偏僻のみ。成功覺束なけん。學問は天性を完全にし、而して又經驗に由て自ら完全にせらる。蓋し天成の才能は、恰も天成(野生)の草木の如し。學問は以て芟りこむを要す。而してまた、學問其物は、——經驗を以て自然に制限するに非ざれば、——餘りに漠然たる教訓を垂るものとす。(ヘエコン)

これを常に記憶せよ

教育は尊敬すべきものである。併し知つて置く價値あるものは、一として教へ得られるものでないことを常に記憶して貰ひたい。(オスカア、ワイルド)

感情文學

英國人の感情文學は滑稽で、情が細かである。佛蘭西人の感情文學は、俗受けがして涙もろい。獨逸人ののは天真で寫實に近い。(ゲエテ)

藝術

藝術の眞生命

個性の捕捉及び描寫といふことは藝術の眞生命なのだ。我々が物の類性ばかり扱つてゐる間は、誰にでも眞似されるが、個性になると誰にも眞似が出来るといふわけには行かない。何故なら、他の人が其れと同一の經驗をしようと、いふことはないからだ。そんならば個性を寫したものは、他の人に感ぜしめぬだらうと思はれるかも知れないが、其の心配はない。それは世界のありとあらゆるものは、皆繰り返しては顯はれるもので、たつた一度のみ存在したといふものはない。凡て物の性質には、どんな特殊的に見える個性でも又物の形狀には、人間をはじめ、石ころまで、皆其間に類性を具へてゐて、全く他人の經驗とほとんど交渉のない個性ばかり持つてゐるものはないから

だ。(ゲエテ)

最善の作者

最善の作者は、著作家になることを恥づるところの人であらう。(ニイチエ)

劇場は教會

劇場は日曜以外の日の教會である。そして面白い芝居は、人爲的の儀式、信仰の商賣、及説教の結合たる教會の禮拜と、その本然に於て同様なものである。(シヨオ)

死滅したのではない

人間の脳髓といふ羊革紙の原稿に連續して彫り付けられた喜悅や苦痛の詩は無數である。恰も斧斤の這入らない深森の木葉や、ヒマラヤ山の千載不滅の雪や、光の上に落つる光のやうに、かう言ふ詩の不斷の層は堆積して、交る交る忘却にその表面を覆はれてゐる。併し終焉の時にも又熱病の時にも、若くは鴉片の力で求めればかゝる詩

は總て生命の力を再び帯び來ることが出来る。是等の詩は死滅したのではなくて睡眠してゐるのである。(ボオドレイル)

思想家のまづい文章

大抵の思想家は、拙い文章を書く。なぜならば彼等は、ただに彼等の思想を傳へるばかりでなく、その思想の考へ方をも傳へるからである。(ニイチエ)

小説といふものは

私は惟ふ、小説といふものは、常に退屈の所産である。と眞實の生活が、空虚が没趣味で、そして煩瑣でたまらない境遇から脱れんとする努力である。故にまたその根本に於て、紳士的な産物である。(シヨオ)

詩人といふ言葉

詩人といふ言葉には、辯疏的のひびきあり。罪の容捨とあらゆる弱點の寛假とを豫

想せしむる響きあり。(イブセン)

形象藝術

形象藝術は言語に絶する物象を翻譯する道具である。故に言語を以つてその意味を示めさうと試みるものは、愚かなことである。(ゲエテ)

唯一独自の物産

藝術の作品は唯一独自の産物である。(オスカア、ワイルド)

型

生れたまゝでは満足の出来ないけちな奴等がある。人間といふ窮屈な型を造つて其の中に這入り込んでよろこんでゐる。もつと小さな新聞屋とか、商人とか、小説家とか言ふ型に這入りたがる奴も随分ある。そしてそいつらはものを作るにもその通りで小説とか何かきまつた型をわざ／＼拵へて置いて、それからそれにはめるやうなもの

の製作に従事するのだ。(オゾルコフ)

作者の資格

君は作者たる資格を凡て俱有してゐる。暖き思ひやりある感情と経験と、人及び境遇に對する觀察と、有りあまれる聰明と、現實をより内的なる、より高き眞理の域に達せしむる理想化の力——詩の源泉たる理想化の力とを有してゐる。(イブセン)

小説に誑かされる

人々は凡て現實に對して、無意識であるがために、小説によつていたく誑かされるのである。(シヨオ)

作家と歴史

現代の作家は、歴史に精通せざるべからず。然らずんば、彼等は社會及人間に對して徹底せる深酷なる批評を下すこと能はず。(イブセン)

作者の逆説

ある讀者が反感をもつところの所謂作者の逆説は、屢々全く作者の書物の中にあらずして、むしろ讀者の頭の中にあるのである。(ニイチエ)

バイロンと他の詩人

ロードバイロンは他として、英國人として、天才として、この三方面から觀察しなくてはならぬ。彼の性質の好い所は、人間の生來だし、彼の弱點は英國貴族の通弊だが、彼の才は實に天品である。英國人はすべて政治狂で實業家だから回想を好まない。バイロンは他の詩人が回想する所を神來の靈感で作るのだ。(ゲエテ)

自身を藝術的に

藝術は決して、一般的であるやうに試みてはならない。一般公衆こそ、それ自身を藝術的にしようと試みなければならぬ。(オスカア、ワイルド)

一般受けの小説は

事實に於て、一般公衆が健全であると云つてゐる所謂一般受けのする小説は、常に全然不健全な産物である。そして一般公衆が不健全な小説と呼んでゐるところのものは、常に美しい健全な作品である。(オスカア、ワイルド)

眞の藝術家は

眞の藝術家は公衆に對しては何等の注意を拂はない。彼れに取つては公衆といふことは存在してゐない。彼れは罌粟菓子や密菓子で、公衆といふ怪物を眠らせたり、生き永らへさせたりするやうなことをしない。彼れは、それを通俗小説家にまかせて置くものだ。(オスカア、ワイルド)

大詩人たらしとするものは

文明の社會に於て大詩人たらしとする者は先づ第一に小兒に歸らねばならぬ。――

心の綱を一つく解きほどかねばならぬ。今日までは彼が優越の主要なる原因となつてゐる知識も、多く之を忘れ去るの必要がある。(マコオレイ)

遁れるにも關聯にも

世を逃れるに藝術程 確かな道はない。又世と關聯するに藝術ほど、適當な道はないであらう。(ゲエテ)

藝術家の任務

藝術家が、公衆に負ふところあるにあらず、公衆が、藝術家に負ふ所深きなり。自己自身のためにこの點を力説するは、凡ての顯はれたる藝術家の任務なりと予は考へるのだ。(イブセン)

ぼろくゝの材料

藝術が、ぼろくゝの材料を纏つてゐるとき、それは、最もたやすく藝術として認め

られる。(ニイチエ)

價 値

吾々は金貨や銀貨や紙幣を持つてゐるが、皆それくゝの價値がある。併し兩替の相場を知らなければ、其れを評價することが出来ない。文學でも同じ事だ。君は金貨銀貨の價値を知つてゐるが、紙幣の價値を認める丈けにまだ眼が利いてゐない。(ゲエテ)

音樂の無限の威力

音樂の無限の威力は、虚りの現象から脱し、靈魂の内面世界から事物の眞髓を見出さしめる處の唯一の手段であり方法である。(ダヌンツイオ)

純粹の幻想家

美の崇拜者には少しも正氣といふことはないのだ。正氣たるにはそれは餘りに華々しい。美を生活の基調としてゐるものには、常に世の中から純粹の幻想家たるべく思

はれて居るのだ。(オスカア、ワイルド)

藝術と國民

國民が劇場よりも教會を建つることを重んずる内は、また美術館よりもヅル、布教團の維持が容易なる内は、藝術の眞の繁榮は望むべからず。のみならず藝術の必要すらも、眞に認めらるゝにあらず。(イブセン)

『何』といふ疑問

藝術上に於て『何』といふ疑問は『如何なれば』といふ疑問よりも大きな興味を人々に與へる。前者は各人之を了解するけれども、後者は到底捕捉することが出来ないからだ。(ゲエテ)

技巧と藝術の力

技巧と、藝術の力とは、何時も大抵正反對であるものだ。(トルストイ)

現實に見てゐるから

繪畫は最も粗惡なものも、非道い排斥にあはずに通過するものである。何んとなれば吾々は、それよりも尙惡い物象を現實に見てゐるからである。(ゲエテ)

藝術の最も強き効果

藝術はあまりに狹隘な限界の内閉ぢこめられてゐる——もしも、たゞ整然とした道徳的は釣合のよく取れた魂だけが、そのうちに自らを表白し得るやうにと要求されるのであつたならば、造形美術に於けるが如くに、音楽や詩に於ても、また美しき魂の藝術と相並んで醜い魂の藝術がある。そして藝術の最も力強き効果は、魂の破碎や、石を動かすことや、禽獸を人間にすることは、恐らくあの藝術によつて最もよく成し遂げられたであらう。(ニイチエ)

人の心を一杯に

音楽は人の今まで知らなかつた過去を、其の人の爲めに創造して呉れ、そして涙から隠れて居た悲哀の情でその人の心を一杯に満たして呉れるのだ(オスカアワイルド)

詩人が筆をとるのは

詩人が筆をとるは稱讃せられんがために非ず。民衆のうちに萌し初めたる思想を明白に表現せんが爲なり。創造し構成する力は彼のみの有する所なれども、其の作品を鑑賞し享樂する力は、全國民之を有す。(イブセン)

一人前の詩人だ

自分の僅かな主観的な感じだけを歌つてゐるうちは、未だ詩人など、はいはれぬ。世界を自分の樂籠に取込めて、それから引き取すことが出来てこそ初めて一人前の詩人だ。こうなれば種の盡きることないし、いづれも新しくてゐられる。(ゲエテ)

過去に於ても然り

凡ての立派な想像的作品は自覺的で、又熱慮して作られるのだ。詩人は諸はねばならないが故に歌ふものではない。少なくとも偉大な詩人はさうではない。大詩人は歌はうと選擇したが爲に歌ふのだ。それは現在もさうであるし、又過去に於ても常に然うであつた。(オスカア、ワイルド)

一種の淫賣婦

現今の藝術は、所謂上流社會なるもの、ために、玩弄的の娛樂を仕組んだものに過ぎないのだ。其の性質がまるで淫賣婦に類して居るのみならず、立派な一種の淫賣婦に外ならない。(トルストイ)

藝術は世界共通

愛國的の藝術だとか、愛國的の學術だとかいふものはない。凡ての高尚な世の實と同樣に藝術も世界の共通物である。(ゲエテ)

一 層 詩 的

詩人とは書くのみのいひに非ずして、讀者をも意味す。兩者は合作者なり。時として讀者は詩人自身より一層詩的なることあり。(イブセン)

藝術にも流行がある

服装に時の流行があるやうに、藝術にも亦時の流行がある。そして恐らく誰人といへども、風習の影響及び流行の影響から、全く脱するといふことは到底出来ないであらう。(オスカア、ワイルド)

韻 文 と 演 劇

韻文は演劇の大なる禍因なりき。これは將來の戯曲家の目がくる所と一致せざるが故に、近き將來の戯曲に於いては、何等の注目をひく程度には決して使用せられざるべし。(イブセン)

傑 作

凡て優秀なる作品は、一時吾人を恐縮させる。匹敵すべからざるを感ずるからである。後に是を自分の素養のうちに體現して、精神と心情の一部となしたるときに、初めて貴重なものとなるのである。(ゲエテ)

名 人

ゲーテは何處かで言つた——「制限内で仕事する時に名人は名人らしくなる」それで、この制限、あらゆる藝術の眞の條件たる制限は文體である。とは云へ、吾々はシエクスピアのリアリズムにかれこれためらつて居る必要はない。(オスカア、ワイルド)

退 歩 する 作 物

凡て退歩し滅亡しかゝる時代の作物は主觀的だが、進歩する時代のものは、客觀的の傾向がある。我々の今の時代は主觀的だから退歩しつゝあるのがわかる。それは作

には限らない。繪でもさうだし、他のものも大抵さうだ。(ゲエテ)

戯曲と抒情詩と史詩

戯曲は抒情詩と史詩とをつなく連鎖なり。史話の時代を戯曲に仕くめば遙かに現實化せらる。されどこの現實化は最もさくべき所なり。彫像は皮膚、毛髪、眼などに自然色を附せらるゝとも何等の益するところなし。(イブセン)

自然主義

何故、自然主義を發展の能力に充ちた新美術に紹介する時、非難するのであらうか。其時の神々は歸つた。そうして、「牧人の神に逆らへ」といつた詩人を美術家の聲句は非常に強い反響を與へた。其れがために、自然は數世紀の永い睡眠から覺醒た。神の協力がなくては、何物と雖も存在することができない。判然した自然主義は一度存在した以上、今も存在せねばならぬ。さうして、——即ち新しく生れた物質と精

神調和でなければならぬ。(ストリンドベルグ)

近世文學俗惡の因

研究するものでも著作するものでも、個人として人格の足りない事が、近世の文學の俗惡な原因である。特に人格の足りない批評家は開達つたことを正しいやうに公言するが、つまらぬ眞理を楯にとつて、我々のために偉大なるものを毀すかして、とかく世の中に害毒を流すものだ。(ゲエテ)

最高の藝術

最高藝術は人間精神の負擔を排斥する、そして藝術に對する熱誠から、又は何か高尚な欲望から、又は人間意識の大なる眼ざめからよりも、新しい媒介物や新鮮な原料からして、より多く得るところのあるものだ。藝術は、己れの向ふところへ單純に發達する。そして藝術はいかなる時代のシンボルでもない。藝術のシンボルがつまり

時代なのだ。(オスカア、ワイルド)

あらゆるものに降る

藝術は空想的媒介に降るとき、あらゆるものに降つてしまふ。(オスカア、ワイルド)

蕪菁はうまい

吾人は取材(藝術の)の多方面なることを必要とする。蕪菁はうまい。特に粟と一共にくへばうまい。そしてこの二種は遠く産地を隔てゝゐるのだ。(ゲエテ)

音楽の性質は

耳は、恐怖の器管は、たゞ夜陰に於て、暗い森や洞の夜陰に於てのみ、あんなにも善く發達することが出来た——臆病者の、即ち、人間の會てありし最も長い時期の生活方法に適應して、明るみに於ては、耳はそれほど必要でない。夜陰と半夜陰との藝術としての、音楽の性質はそれに由來して居る。(ニイチエ)

現代の重なる文學

現代の主なる文學が不思議なほど陳腐常套の性質を帯びるに至つた主要な原因の一つは、藝術とし、科學とし、社交的快樂とし架空の衰頹したためであることは、疑ふ餘地のないところである。(オスカア、ワイルド)

高尚なもの

學者はラテン語で演説し、筆書することを以つて、自分が世間から免されたよりも、より高尚なものである。(ゲエテ)

作品と藝術家

此藝術家は功名心に燃えて居る。そして其の上何物でもない。結局彼の作品は、彼の方を見てくれる各人に彼が提供するところの一擴大鏡たるに過ぎない。(ニイチエ)

自然

自然はいつも公平

自然は諧謔を解し得ない。いつも眞實で眞面目で嚴格だ。自然はいつも公平だし、自然は自然を辯別する力のないものを嫌ふが、その力ある誠實な純潔な者は心を許して秘密を打ちあける。(ゲエテ)

自然とは悪黨の神

若し好悪なるもの榮え、而して適者のみ生存するならば、自然とは悪黨の神でなければならぬ。(シヨオ)

自然は吾等を神たらしむ

如何に自然は廉價なる少數の材料を用ゐて我等を神たらしむることぞ。余に健康と

一日とを與へよ、さらば帝王の榮華も余に於て實に笑ふに堪えたり。(エマアソン)

幸運の参加

天(自然)如何に渥く賜ふ所ありとも、天のみにては英雄を作る能はず、必ず幸運の参加するを要す。(ラ、ロシフコオ)

憂ふ可き事

吾人が千變萬化せる自然に統一の法則を見出す時に、油然として心の根底に喜びを湧かせる、林檎の落つるのは不思議だが、引力のあることは左程に神秘だとは思はれて居らない。宇宙の推移嗣承は面白いが、生物が一階級から、一段進化して行くのは左程に面白がられて居ない。憂ふべき事は吾等が、斯る法則を捉へて、これが思索の最終であると考へて居ることである。(タゴオル)

自然、夢、音楽

美しい自然、夢、音楽、何時も何時も同じ物語、然しそれも又現實である。明らかに眞理と幸福とは現實の生涯の外に何處かに存在してゐるのである……人は自己の生涯を見捨て、この多くの花や古墳や、遠い／＼地平線やを持つた茫茫とした草原と永遠その物のやうな無限の擴がり、自然の冷厳さとに自分を融合させて行かねばならないのだ。そして聽てその人にとつて其方が寧ろ仕合せなのであらう。(チエホフ)

美と喜び

蜜蜂などには單に色と香と蜜を尋ねて行くべき所の、目標に過ぎないものが、人の心には必然に迫られない美と喜びになるのだ。其等の花が様々な色インクで書かれた愛の書簡を心の中に携へて來る。(タゴオル)

自然萬有の中潜む侵蝕の力

私の靈の前では、既に幕が開いて居る。無限の生命の舞臺は、私にとつては永劫口

を開いた底なしの墳墓の淵となつてゐる。物が存在すると君は言へるか。君が破壊者でない刹那があるか、罪のない散歩にも憐れな地蟲の何千といふ生命に關はる大事だつた一足踏み出ただけで、蟻の巢を壊してしまふ。世界に稀れな災難、地震、洪水の數を私は怖れてゐるのではない。私の心を埋めるものは、自然萬有の中に潜んでゐる侵蝕の力だ。この力を除けば、後は自分と自分の隣人を破壊するに過ぎぬ。此の事を思ふと、私は怖ろしさのために眼が眩む。ああ、私の身邊にある天地と、それを動かす自然の力よ。あゝ、彼は永久に吞却吐却し、永久に反芻むところの怪物ではないか。(ゲエテ)

多感な人と自然の美

考へ深い人が、多感な心をもてばもつほど、自然の美に接して起る歡喜を強く感ずる。この時、楽しい深い瞑想がその能力を失ひ、この麗はしい無限な調和に溺れて、

心地よく酔ふて了ふ。そして個々の事物は、悉く消え失せて、ただその全體のみ目に寫り、心に感ずる。若しこの宇宙を部分的に觀察しようとするれば、或る特殊な事情で自分の觀念を狭ばめ、自分の想像を制限しなければならぬ。(ルツソオ)

自然は一種の大運轉機

『自然』は是れ一種の大運轉機である。靈知及び感動の通路にして、際限なき聯結事業である。而して此宇宙の全領域は、是れ意識生活の無限なる交代運動の舞臺であるのだ。(カーペンター)

自然とは何もの？

自然とは何もの？ 自然は吾々を生んだ偉大なる母親ではない。自然は吾々の作り上げたものである。(オスカア、ワイルド)

労働者の様だ

花さく植物を一例に擧ぐるに、如何にその花が美妙に見えても、其は或る大きな仕事を持って居て、其の定業に適した様に花も形も出来てゐる。即ちそれは實をならせなくてはならぬといふのだ。でなくては、植物生活の永續は絶え、地は間もなく荒蕪たる狀に變ずる。だから花の色や香は或る目的のために、蜜蜂が来て蜜を吸ふかと思ふと花瓣が散り、香は失せて實を結ぶ。暫くもその美しい様を誇る隙がない。始終忙しいばかりである。外界から見れば、必然は自然の本能で、その爲に自然物は悉く働き動いて居る様である。蕾は花となり、花は實となり、實は種となり、種子は復新しい植物となつて生え出で、斯うして活動の連鎖はくるくるとして廻つて行くのだ。そして若し混亂妨害が生じたら、何の容赦もなく薙ぎ倒され、引き抜かれて棄てられ枯死して間もなく形を止めない様になる。自然の大官衙には限りない局があつて、限りない仕事が行はれ、美はしい装ひと芳ばしい香とは奢侈な女の様に似て居るが、そ

の實は雨に晒され、日に晒され、定りの業に餘念無く、楽しい嬉戯にホット息つく際も無い勞働者の様である。(タゴオル)

田園森林が人間に供する悦樂

田園森林が我等に供する悦樂の最大なるものは、人間と植物との間に存する玄妙なる關係を暗示することなり。——植物は悉く余に向つて點頭し、余も亦之に向つて點頭するなり。(エマアソン)

地の光

我々が、光線の競争者なる我々が、空氣の爲めに、純潔なる空氣の爲めに生れたこと、我々が光線の如く最も好んでエテルの原子に騎り、そして太陽から遠ざからずに、むしろ太陽の方へ騎り行かうとすることを、我々は禁じ得ない！ しかしながら我々は騎り行くことが出来ない。かくて我々は、我々が爲し得る唯一の事をなさうと

欲する。即ち、地に光をもたらすこと、『地に光』あらしめようと欲する！(ニイチエ)

自然と創作

よく吾々は言ふ。美術家よ、行きて自然を研究せよと。これは言ふことは洵に易いが、しかし平凡な事實のうちから、透逸を拾ひ、混沌とした状態から纏つた美を擲むことは、決して小さい事ではないのである。(ゲエテ)

自然の貪婪

何故に自然は、人間の内的な充實に應じて、これにより多く、かれにより少く、彼をして輝かしまないほど、彼にまで吝嗇であつたのか？ 何故に大なる人間は、その出入りに於て、太陽の如き美しきあざやかさを有たないのか？ さらば人々の間なる總ての生活が、如何に遙かに曖昧ならねものであつたらうよ！ (ニイチエ)

太陽は依然として

雲は之を蔽ふ事あるも、太陽は依然として天上に輝いて居る。(ヒムメルチエルド)

暗雲は幕

暗雲は幕である。太陽は其の後ろに美はしき顔を隠して一層の美を加へようと、情を銜ふのである。(ゼエン、ポオル)

太陽と死物

太陽と死物の二物は熟視すること難し。(ラ、ロシフコオ)

自然の美は己が心意

自然の美は、己が心意の美なり。自然の大法は己が心意の大法なり。斯くなれば自然は自己の識徳の成不成を測るの規矩となるなり。自然を知ること淺ければ、自己の心意を領有することもそれだけ淺きなり。されば結局、古代の訓言の『己れを知れ』と、近代の訓言の『自然を研究せよ』とは竟に同一の格言となるなり。(エマアソン)

自然の生命

一致せるものを分離し、分離せるものを一致せしめるは自然の生命なり。(ゲエテ)

自然の感化

人心を感化するものうちで、最も早く來り、且つ最も重大なるものは、自然の感化である。(カアベンター)

自然の光彩

自然の光彩は燦爛として輝き、全體にも部分にも光線の如く、上下四方八方に中心もなく、圓周もなく放光して、自然は己が身上を語らんとして、學者の心裡に入るを急ぐものなり。(エマアソン)

自然の母

自然といふ母は、一つ宛我等の玩具を取り上げて、そつと寢床につれて行くのであ

る。が、餘りその様子が柔らかで物優しいために、行きたいやうな行くたくないやうな、妙な氣持で導かれて行く。併し眠つたい眼をこすりく行くものだから『不可解』の領分が『可解』の領分より何の位多くあるのかが分らない。(ロングフェロオ)

六十大 文豪 世界皮肉文集 終

大正九年十一月廿四日印
大正九年十一月廿四日發

行刷

(世界皮肉文集)

正價 金壹圓六拾錢



發行所

東京市麴町區麴町三丁目二番地
振替口座東京一〇八六番
電話九段二〇九一番

日本書院

編者 春本文壽
發行所 東京市麴町區麴町三丁目二番地
福田滋次郎
印刷者 東京市神田區西小川町二ノ六番地
小島爲吉
印刷所 東京市神田區西小川町二ノ六番地
大成社

387

183

終